

【日本の大学】第 69 回——名古屋市立大学：「知の創造の拠点」へ果敢に行動

名古屋市立大学は中部圏の大都市名古屋市に 1950 年に設立された公立大学である。源流は 1884 年に開校した名古屋薬学校と、第 2 次大戦中の 1943 年に創立した名古屋市立女子高等医学専門学校（1947 年に名古屋女子医科大学に昇格）であり、この 2 校を統合する形で発足し、薬学部と医学部という 2 学部体制でスタートした。当初の入学定員は薬学部が 80 名、医学部が 40 名であった。

その後、地域社会の要請に応じてほかの分野にも教育・研究領域を広げ、現在は上記 2 学部のほか、経済学部、人文社会学部、芸術工学部、看護学部、総合生命理学部の計 7 学部と 7 大学院研究科を擁する都市型総合大学となっている。

2014 年に制定した大学憲章には前文で「本学は、これまで一貫して地域に開かれ、広く市民と連携し、協働してきており、科学、技術、芸術、文化、産業、経済の発展と医療、健康福祉の向上に寄与してきた。今後も、市民の付託に応え、真理を探究し、人類の幸福に資する実践的な研究成果を世界に発信する『知の創造の拠点』となるため、果敢に行動していく」との趣旨を謳っている。



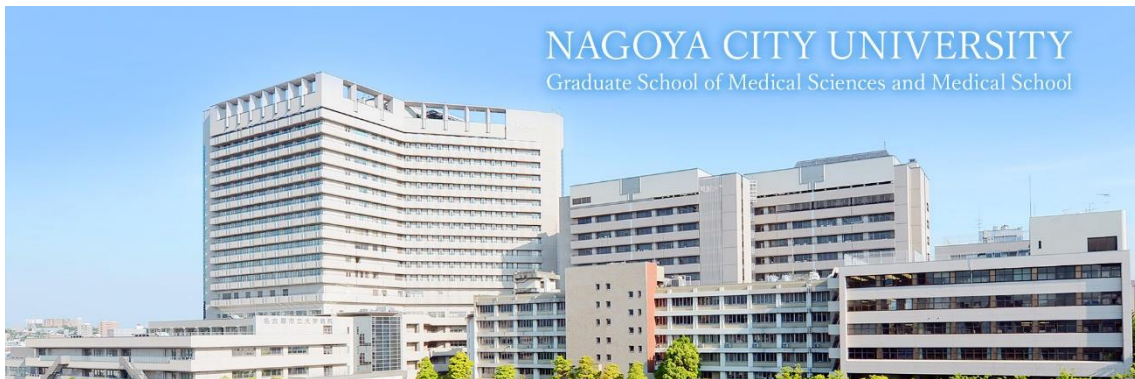
桜山（川澄）キャンパス

140 年の歴史誇る薬学部

以下、名古屋市立大学のホームページを中心に、大学の歴史と現況を見てみよう。

医学部の元となった名古屋市立女子高等医学専門学校は戦争後の1947年に名古屋女子医科大学となったあと、名古屋市立大学の医学部（旧制）となった。新制となったのは1952年であり、教養課程2年専門課程4年の6年制医学部となったのは1955年である。

その後は、医師不足や医学部進学者の急増を背景に定員増や、大学院医学研究科の設置などが次々に図られた。附属病院の拡充、充実も行われており、川澄キャンパスの新病院での診療開始（1966年）、病床数の順次拡大、新病棟・中央診療棟稼働（2004年）や外来診療棟稼働（2007年）、各種医療研究センターの設置、市立東部・西部医療センターの附属病院入りなどが実現している。



大学院医学系研究科・医学部

薬学部は、前身の名古屋薬学校の設置（1884年）から数えると140年近い歴史を誇る老舗の学部である。愛知薬学校、愛知高等薬学校、名古屋薬学専門学校と変遷した後、戦後の1946年には名古屋市に移管して市立名古屋薬学専門学校となった。1950年に名古屋市立大学薬学部となったあとは、大学院薬学科修士課程、博士課程の設置、薬学科のほかに製薬学科の増設、世界各国の大学と学術交流協定の締結などを進めてきた。2006年からは、薬学教育制度の改正に伴って、薬学科の修業年限を4年から6年に延長、4年制の生命薬科学科の2学科制となった。

薬学科は、医薬品と薬物療法に関わる医療科学を総合的に学び、薬剤師国家試験の受験資格を得ることができる。6年間かけて薬剤師をはじめ、医療に関わる種々の分野に貢献できる人材を育成する。生命薬科学科は、創薬生命科学の基礎から先端に至る幅広い知識を学ぶ。医薬品の開発研究者をはじめ、生命科学と医療の発展に貢献できる人材を養成することを目指す。



薬学部・薬学研究科（田辺通キャンパス）

3番目の学部として1964年に設立されたのが経済学部である。経済学科1学科だけだったが、1991年に実務教育重視という時代の要請から経営学科との2学科体制となった。2007年度には、卒業後の進路先を重視する観点から公共政策学科、マネジメントシステム学科、会計ファイナンス学科の3学科制に改編した。公共政策学科では、経済学を学ぶ。国家・地方公務員を中心に、市場経済の働きを理解したうえで、政策や企画の立案を担える人材を育成する。マネジメントシステム学科は組織のマネジメントの仕組みを経営学と制度・歴史の視点から学ぶ。民間企業などを中心とした組織で活躍できる、企業経営をより深く理解した人材を養成する。会計ファイナンス学科では、会計やファイナンスを学ぶ。会計士や税理士に代表される専門職を中心として、それらを実践的に結びつける能力を備えた人材を養成する。

市立短大などを統合し新学部

1996年には、人文社会学部と芸術工学部の2学部が設立された。これは市立女子短期大学、市立保育短期大学、市立大学教養部の三者を統合・改組して誕生したものだ。

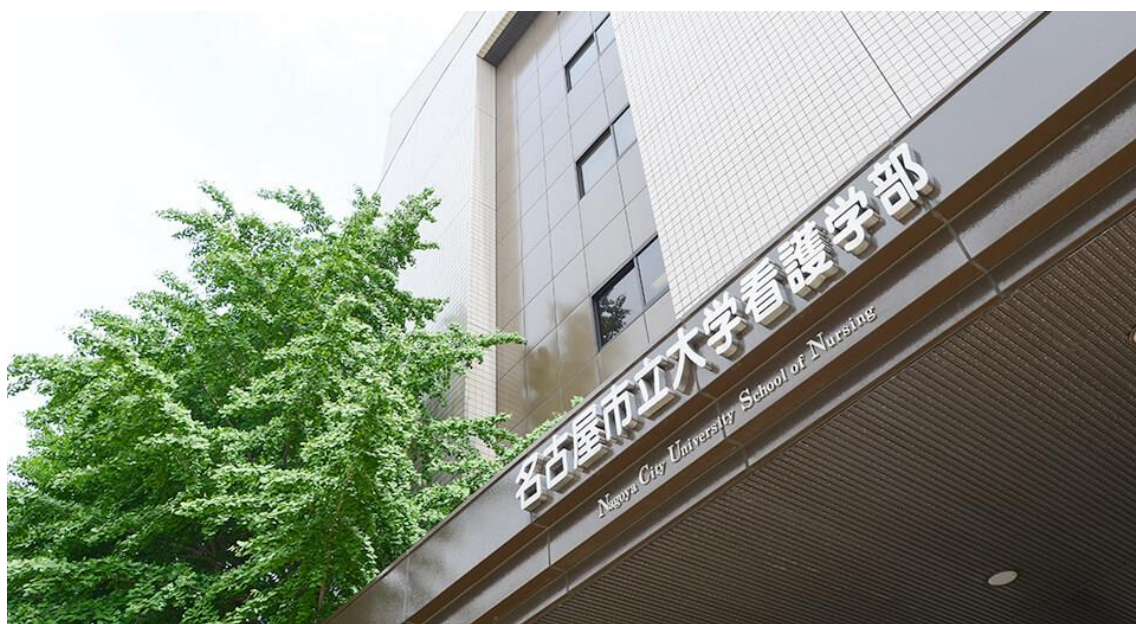
人文社会学部は、人間科学科、現代社会学科、国際文化学科の3学科で構成。2000年と2002年には大学院研究科の修士課程と博士課程が設置された。学部は2013年に人間科学科を心理教育学科に改称している。学部では、自然や他者とのかかわりを通して地球社会及び人間存在を問うとともに、一人ひとりの「持続可能な生き方・あり方」を捉えなおす教育に中心をおいている。

芸術工学部は、デザインをキーワードに、情報環境デザイン学科、産業イノベーションデザイン学科、建築都市デザイン学科の3学科で構成されている。各学科とも、デザイン・芸術の感性と工学の理論を身につけ、人間中心の考え方ができる総合デザイナーの育成を目指している。



滝子(山の畑)キャンパス

看護学部が創設されたのは1999年である。学部の母体となったのは1931年に設置された名古屋市民病院附属看護婦養成所である。その後、名称が変わった後、大戦後の1949年に名古屋医科大学附属高等厚生女学校として開校。1950年に名古屋市立大学の設置によって市立大学附属高等厚生女学校に変わり、さらに1957年に名古屋市立大学看護学校に改められた。高度成長期に入り、医療看護分野でも、看護の質の向上への期待や看護師不足が深刻化したのに対応、入学定員の増加や看護教育の充実が図られた。1988年には大学に看護短期大学部を設置、それに伴い、看護学校は廃止された。看護学部の創設に続き、2003年と05年には大学院の修士課程、博士課程も設置されている。



看護学部（桜山（川澄）キャンパス）

理学分野の強化で新学部

7番目の学部として2018年に設置されたのが総合生命理学部である。医学部、薬学部、看護学部の医療系3学部を擁する唯一の公立大学として、その特色を生かし、さらに生命科学を中心としつつ理学分野を幅広く強化し、地域への貢献をさらに深める狙いで設置された。理学とは、宇宙・自然の真理を探究する学問であり、総合生命理学部では、生命科学、物理学、化学といった自然科学、さらに数学、情報科学を含む理学の基礎を総合的に学び、次世代の科学を担う人材育成を目指す。

キャンパスは本部のある桜山（川澄）（名古屋市瑞穂区瑞穂町）に医学部と看護学部と両大学院研究科があり、その近くにある滝子（山の畑）キャンパスには経済学部、人文社会学部、総合生命理学部と同大学院の学生が学んでいる。このほか田辺通キャンパスには、薬学部、同研究科が、北千種キャンパスには芸術学部、同研究科が入っている。



北千種キャンパス

大学では国際感覚豊かな人材を育成するため海外との学生交流を促進するとともに、国際的な共同研究、支援活動を推進し、地域の国際化への寄与や国際社会への貢献を目指して、2008年には国際交流推進センターを設立（2014年に国際交流センターに名称を変更）、海外の大学や研究機関との交流の推進、学術交流協定の締結を進めている。

留学生向けの奨学金など、国際交流に関する様々な情報を学内掲示板やホームページなどを通じて発信している。外国人留学生と日本人学生を交えたトークタイムを、中国語、ドイツ語、韓国語などの言語で実施している。交流の場としては、留学生懇親会、ウェルカムパーティー、日本文化体験など様々な催しを行っている。外国人留学生は中国を中心に161人在籍している。（2022年5月現在）

学生数は学部が3915（うち女子2156）名、大学院が770名。教員数は683名である。（いずれも2022年5月現在）

大学は従来、理事長が学長を兼務しており、現在の理事長である郡健二郎氏が2021年度まで学長であったが、22年度からは浅井清文氏が学長に就任した。浅井氏は名古屋市立大学医学部医学科を卒業した医学博士。1984年に名古屋市立病院の臨床研修医となり、医師、医学部助手、助教授、教授などを経て、現職。

日文：滝川 進
写真：名古屋市立大学 HP